

手足の不自由な子どもたち

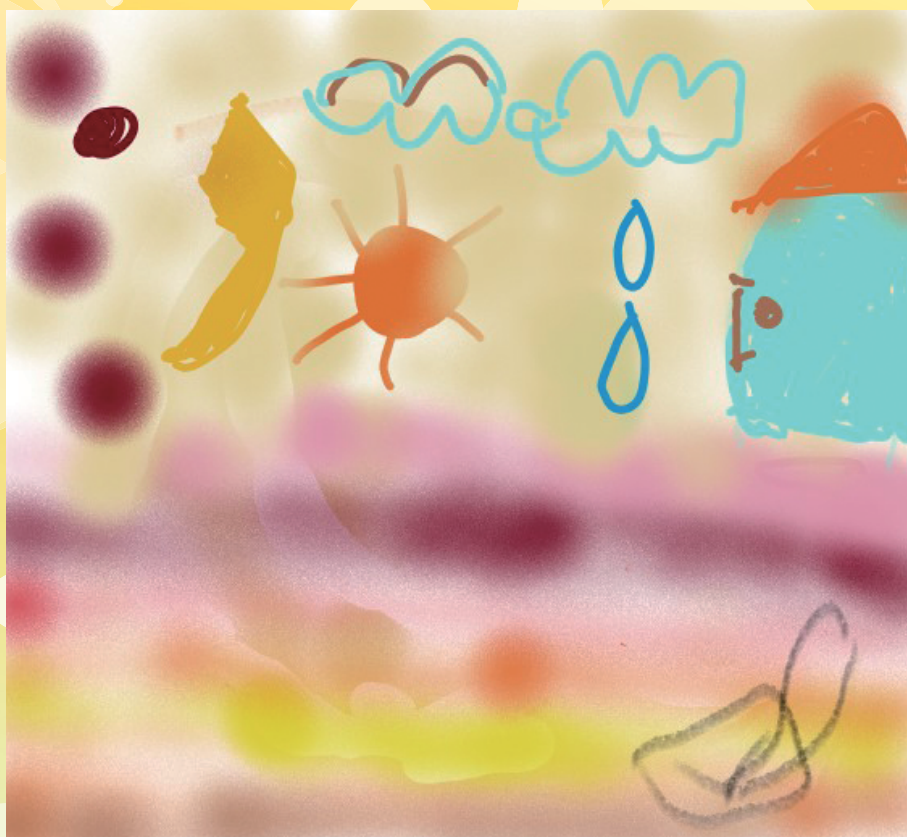
はげみ

令和3年度/No.397

4/5

April—May

特集 **学習や療育へのICTの活用 2**
～新しい日常でのオンラインの可能性～



第39回(令和2年度)肢体不自由児・者の美術展入賞作品「コロナ禍を乗り切ろう!!」
澁谷 芽依



はげみ

令和3年度/No.397

4/5

April—May

特集 学習や療育へのICTの活用2

～新しい日常でのオンラインの可能性～

Contents

広場	新しい日常でのオンラインの可能性	金森 克浩	2
Sec.1	視線入力でeスポーツ		
	ー若いユーザーたちの新領域開拓	大杉成喜・岡元 雅	4
Sec.2	全国から参加できる在宅パソコン実習に、君も！		
	ー未来の在宅就労に向けてー	津田 貴	11
Sec.3	OK！ワークウェルでの合同遠隔社会見学	堀口 明子	17
Sec.4	コロナ禍で実現したTeamsの活用とオンライン授業		
	意思伝達装置を使って授業を受ける	廣田 愛	23
	私のオンライン授業について	廣田 琉花	28
Sec.5	オンライン動画による在宅での身体のケアについて	塩田 琴美	29
Sec.6	うめだ・あけぼの学園における遠隔でのPT・OT・ST指導	酒井 康年	36
Sec.7	肢体不自由特別支援学校でのWeb会議システム活用の事例	近藤 創	42
Sec.8	遠隔合同授業で大切にしたこと		
	ー小学部6年理科「人と環境」からー	岡本 義治	49
Sec.9トピックス	ミラコン2020～未来を見通すコンテスト～		
	第3回プレゼンカップ全国大会 FINAL STAGE		55
今号の表紙		澁谷 芽依	57

新しい日常でのオンラインの可能性

帝京大学 教授

金 森 克 浩

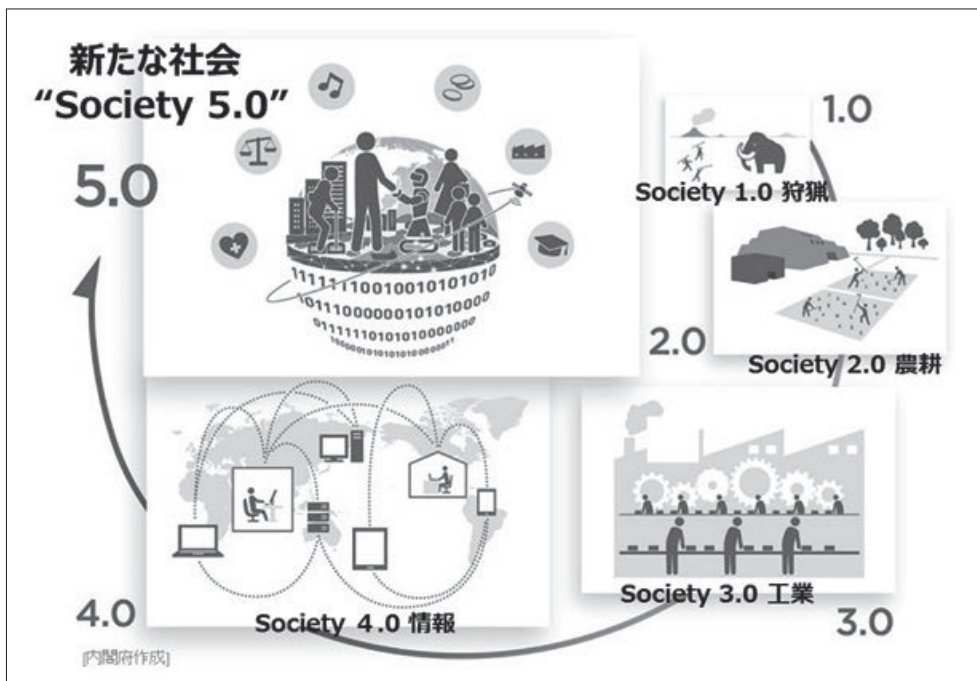
前回の特集（令和2年度2／3月号）では「オンライン学習入門」として30年以上の間、「パソコン通信」と呼ばれるネットワークコミュニケーションの試行からの変化や、当時期待していたことが今どうなっているかを述べました。

今回の特集でも、さまざまなオンラインでのコミュニケーションの実践などが紹介されています。そこで、これらの社会を考えながら肢体不自由のある人にとっての「オンライン」の可能性について考えたいと思います。

今の日本は超高齢化社会と言われています。諸外国もそうですが、ある程度社会が成熟していくと平均寿命も延びてきて、高齢者の割合が増えてきます。すると、生産人口が少なくなり、高齢者を支える若者が減ることが問題点とされます。しかし、本当にそうでしょうか？人間の仕事の仕方は第1次産業を中心とした農業社会から大きく変わってきており、「生産する」ということを人間がすべてまかなわなくても生きていけるようになったのではないかと思うのです。

図表1は内閣府が出した「Society5.0」を解説したものです。

私たちの社会は、狩猟社会（Society1.0）から進化し、農耕社会（Society2.0）、工業社会（Society3.0）、情報社会（Society4.0）に続く、新たな社会としてIoTなどの活用など、さまざまな生活場面でのネットワークや新しい技術がこれまでの社会課題を解決するとしています。そういった社会では、高齢者だけでなく、障害のある人にとっても、能動的に生きていくためのさまざまな技術が生かされるようになります。つまり、人間がすべてをまかなうのではなく、さまざまな技術が人間を支援するようになります。新たな社会（Society5.0）では、過疎地などの遠隔医療にネットワークを活用したり、農作業の自動化、高齢者の移動支援などといったものも紹介されています。そうしたときに、「働く」ということの性質も大きく変わるだろうと考えます。つまり、生きていくという最低限のことは人間が働かなくても保障され、場合によっては「働く」ということ自体も楽しみの一つになっていくかもしれ



図表1 「Society 5.0」 (https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html)

ません。

そのような状況の中で、特に肢体不自由のある人たちの仕事も、これまでのように、会社に行き、健常者と同じように1日8時間働かなければ労働とは認めてもらえないということは違うものになるだろうと思います。具体的には、自宅にいながら自分のペースで、自分のできる能力を発揮するような仕事が増えてくると考えます。これまでもいくつかの、労働形態が考えられてきましたが、令和2年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって起きた社会の大きな変化はその可能性を大きく拡げていたように思います。

オンラインの可能性は、今後ますます広がると考えます。仕事だけでなく、買い物も今まで以上にオンラインで可能になりましたし、学習の形態も大きく変わってきています。ぜひ、そういったものを積極的に受け入れて活用してもらえると、便利なことややりたいと思っていたけれどもできなかったことが実現する可能性が広がります。

前号と今号の特集が肢体不自由教育のある方々にとって新たな可能性に踏み出すきっかけになりましたら幸いです。